

祐天の伝記については、すでに平成六年度の大正大学大学院の論集にまとめた。ここでは、概略を記して以下の経歴を見ていくうえで参考としたい。

伝記における問題点としては、まず、大きく分類して、浄土宗内の立場で記述されたもの（仮に「浄土本」と言う）と一般に広く普及した読み物としての伝記（仮に「普及本」と言う）に大別されることを指摘した。

「浄土本」と「普及本」を比較すると、「浄土本」の記述は、十二歳で増上寺袋谷檀通ふくさかたんのりゆうの弟子となり、檀通の出世に伴って隨身するところから、檀通が遷化したのち、増上寺に帰山するまでの記述がほとんどなく、祐天が増上寺を引退し、その後、桂昌院に取り立てられ、檀林主に出世したあとの記述が中心となっている。それに対して「普及本」は、増上寺での学寮生活から檀通に隨身中の祐天の記述が中心となっており、互いに相補的な関係となっている。したがって、お互いに事実の確認が困難で、伝記が伝記として一人歩きする素地がここにある。

「浄土本」の成立は明確であり、現在確認しえた最古のものは、祐天の三回忌に相当する享保五年（一七二〇）である。それぞれの伝記の内容については、その比較を表一（二三二）

（二四七頁、参照）に示した。伝記の名称については、註にまとめて記す。^{*4}

「普及本」については、伝記の体裁を成すものは宝暦十三年（一七六三）、祐天滅後四十五年を経ている。しかし、それより以前、祐天が在世中に増上寺を引退し草庵生活をしていた元禄三年（一六九〇）に、『死靈解脱物語聞書』が開版され^{*5}広く普及している。内容は、今で言うところの「累解脱物語」で、キクという名の女が半狂乱の状態となり、その原因が累の死霊であると言う。そこで、当時飯沼弘経寺で修行していた祐天が出かけて行って、念仏によりその死霊を得脱させたというものである。この版本が広く世に出たことは、『江戸名所凶絵』の記述や、祐天が大僧正となった正徳年間に再版されていることから明らかである。

この版本が、世に祐天の名を広める役割を果たしたと見ても良いと思われる。そして、これが悪霊祓い師としての祐天像を作り出す原因ともなったと考えうるのである。

そこで、今一度「浄土本」と「普及本」を整理し、祐天の経歴と伝記に見られる諸問題を明らかにしたいと思う。

ただし、混乱を避けるために、主として「浄土本」で経歴を追い、「普及本」の記述については参考にとどめることとする。